

## 〔教育実践の記録〕

### 文学教材を用いての実社会にもつながる力の養成

—主人公の親友・相沢謙吉の視点から考える『舞姫』の授業実践—

大井 良知（大阪教育大学附属高等学校池田校舎）

#### 実践の目的

2022年から実施される予定の新しい学習指導要領においては、高等学校における国語教育のあり方が大きく変わる。その中で、特に従来との大きな違いは、実社会にもつながる知識や技能の習得が強調されている点である。その中でも、従来の文学教育をそのまま継承すると考えられる「言語文化」や「文学国語」においても、「生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付ける」ことが目標として明記されている。このことを考えると、小説を題材にした授業についても、かかる知識や技能の習得につながるような授業を構想する必要がある。そこで、高等学校において定番教材の一つとされる小説『舞姫』を題材に、実社会にもつながる知識や技能の習得にかかわる授業をどうつくるか、その構築と生徒の取り組みの観察を目的として、授業実践を行った。

従来の文学教育においては、小説の読解は基本的に本文の主人公の視点にそって、ストーリーを読み進め、途中にある語彙や表現、登場人物の心情等を読み解いていく形の授業が多い。対して、今回の実践ではストーリーに矛盾が生じない範囲で、小説には描かれていない場面のやりとりを考えさせるという位置づけでの授業構築を意識した。

#### 授業実践の概要

1 単元名 小説「舞姫」『精選 現代文B』（大修館書店）

2 本単元及び本時について

小説『舞姫』は森鷗外の代表的な作品の一つであり、多くの高等学校において3年生で取り扱う小説の教材として採用されている。この小説を取り扱う授業は、従来、主人公である太田豊太郎の視点から立身出世とエリスとの生活のどちらかを選ぶかという葛藤や、それに関わる近代的自我について考えることを中心的なテーマにすることが多い。しかし、それでは学習内容について実社会で必要な知識や技能の習得とはつながりにくい。

一方、豊太郎の親友である相沢謙吉の視点で考えると、豊太郎を大学時代から知っていた立場の人間として、豊太郎の人となりや能力を客観的に分析しようとする面を見いだすことができる。そして、与えられている事実から個人の人となりや能力を分析することは、それ自体が社会的に要求される技能の一つであると言える。同時に、ストーリーの中において、相沢の視点から豊太郎の「実績」や「長所」を見いだすことができれば、そのこと自体が本文の読解ともつながるといえる。

また、相沢謙吉が天方大臣に豊太郎を推薦するやりとりは、その具体的な内容が本文中に記述されていないものの、最終的に天方大臣が豊太郎に直接、一緒に日本に帰ろうと誘

う場面があることから推薦は成功したとみることができる。そのことから、相沢謙吉がどのような言い方で天方大臣に豊太郎を推薦したのかを考えさせるという過程で、実社会にもつながる「他者を推薦する技能」につながると考えられる。「他者を推薦する技能」は、究極的には自分をあたかも他者のように客観的に分析し、そしてその能力や長所を相手方に示すということにもつながり、それは最終的に大学入学試験や就職試験、その他留学などの選考等においても必要となる自己PRの技能を身につけることにもつながる。そのことから、相沢が豊太郎を天方大臣に推薦した時にどのようなことを言ったのかを考えさせることは意義があると考えられる。

本単元は、2018年の9月から1ヵ月間行われた。事前に、生徒たちには夏休み期間中に『舞姫』の全文を読んでおくように指導した。その上で夏休み明けに、7時間でストーリーの内容について解説する授業を行った。ストーリーの解説については細部の説明はせずに、場面の大きな転換点となる部分を中心に、登場人物の心情把握や、情景描写などを含めて取り扱った。特に豊太郎に自我が芽生える場面、エリスとの出会い、免職と母の死、天方大臣との出会いからロシア訪問、帰国を誘われる場面から最後まで、人間関係が大きく変わる場面を意識してストーリーの解説を行った。

本時はその7時間の授業の後、本単元の最後の時間に行われた授業である。

### 3 展開 ※授業で用いたプリントは、資料の方に掲載している。

学習過程	学習活動および内容	生徒の活動	指導上の留意点
導入 10分	ストーリー全体を振り返りながら、プリントの課題①に取り組む。	各個人で教科書等を見ながら、プリントの課題①に取り組む。	相沢と豊太郎の接点がある場所を特に重点的に確認させる。
展開 35分	生徒同士でグループを作り、課題①で各自が見つけた解答を相互に共有した後に、課題②～④に取り組む。	4人前後で1つのグループを作り、プリントの課題に取り組む。  教科書等の書籍に限らず、スマートフォンやタブレット等の端末も適度に使用しながら、課題に対する解答を作成する。	各グループを机間巡回しながら、話し合いに行き詰っているようであれば、適宜アドバイスをする。
まとめ 5分	実社会でも使える考え方を、プリントを用いてまとめる。	プリントの最後にある「まとめ」の部分について取り組む。	

#### 4 評価規準と評価方法

- ① ストーリー全体の流れを正確にとらえ、課題に取り組んでいる。

(机間指導による観察)

- ② 相沢の視点から豊太郎の特徴や実績、長所を客観的に把握し、それを課題の答えとして表すことができている。

(机間指導による観察・プリントによる確認)

#### 授業の実践の様子

導入場面においては、課題①について、プリントに最初から豊太郎が大学の法学部をトップの成績で卒業したことを例として記しておいた。それを参考に、生徒達は本文内から豊太郎の実績と言えるものを探していた。多くの生徒達が指摘したものとして「翻訳・通訳ができた」という点がある。これは豊太郎が天方大臣からの文書の翻訳の依頼を受けたことや、天方大臣のロシア訪問に際し通訳を務めたことから読み取れる内容である。また、「新聞社で通信員として仕事をしていた」という点を実績としている生徒もいた。豊太郎は官僚を免職になった後、相沢の紹介で新聞社の通信員として働き、当時のドイツ国内の様子などを詳しく記事にしている。これも実績であると言うことは、決して間違いではない。さらに「ドイツの大学で勉強していた」を実績としている生徒や、「貧しいエリスを支援した」ことを実績ととらえた生徒もいた。

展開場面においては、課題②について、課題①の「翻訳・通訳ができた」点からほぼすべてのグループが、「語学力が豊富」という点を能力や長所としてあげていた。また、「新聞社で通信員として仕事をしていた」ことや「ドイツの大学で勉強していた」点から「ドイツやヨーロッパの事情に詳しい」という点を長所としてあげていたグループがあった。他にも「貧しいエリスを支援した」ことから、「弱い者に救いの手を差し伸べる」という旨のことを長所としてあげたグループもあった。

課題③については、天方大臣の求める人材という通常とは少し異なる視点からの題を示したが、日本史の教科書や資料集を用いて考えていた生徒がいた。生徒から出たものとしては「不平等条約の改正の役に立つ人材」が多かった。天方大臣がドイツにやってきたのは小説の中で明治21年の冬とされているが、この時期は実際に不平等条約改正に関する様々な交渉のさなかであり、天方大臣も政府の要人の一人としてそれを意識した人材を欲していたと考えるのは妥当である。また「ドイツの憲法や政治をよく知っている人材」をあげたグループもあった。これについても大日本帝国憲法がドイツの憲法をモデルにしてつくられた点や、行政関連の制度の多くがドイツの法律を参考にしてきた点から、妥当性が認められる。これに加えて、そのような近代的な法制度の整備が不平等条約の改正にもつながっていたことを考えると、天方大臣の求める人材像にヨーロッパ、特にドイツの行政や法制度をよく知る人材というものが考えられることも肯定できる。このように、話し合いの内容からも、生徒の多くが当時の近代化を進める日本の課題を正確に意識できていたと認められる。

課題④については、グループによって内容の違いに差が見られた。小説の中では、天方大臣は豊太郎に対し「君の学問は私が理解できるものではないが、語学だけで十分に役に立つだろう」と言って日本への帰還に誘っている。そのことから、シンプルに「豊太郎は語学力だけで十分に大臣の役に立ちます」という内容の答えを書いたグループが複数あった。しかし、他方で課題③を踏まえて、ただ語学力だけで推薦したのではなく「語学力の高さをいかして、不平等条約の改正の交渉に使えます」とか、「豊太郎はドイツに長く滞在しているので、ヨーロッパの事情に詳しく、不平等条約改正にも役立ちます」という答えを作ったグループもあった。

また、不平等条約改正の話とは別に、豊太郎が当初ドイツの大学で法律や行政を学んでいたことをもって「憲法や行政の仕事に使えます」という答えを作ったグループもあった。

### 実践の成果

本時の授業で筆者が意識したのは、他者を推薦する際の考え方の基本的な型であるが、その内容は授業の最後のまとめにおいて、次のように示した。

- ①「実績」を、できる限り具体的にあげる。
- ②「実績」を整理して、そこから能力(長所・PRできるポイント)を抽出する。
- ③相手方の需要(天方大臣にとっては、必要となる人物の特徴)について、しっかりと把握しておく。
- ④実績からなる能力(長所・PRできるポイント)が、相手方の需要をどう満たすかを、できる限り詳しく、具体的に説明できるようにする。

これは、大学受験や就職試験などにおける自己PRの方法に置き換えると、次のようになる。

- ①自分の「実績」を、できる限り具体的にあげる。
- ②自分の「実績」を整理して、そこから自分の能力(長所・PRできるポイント)を抽出する。
- ③相手方の需要(大学だとアドミッションポリシー、就職では求める人材像)について、しっかりと把握しておく。
- ④実績からなる能力(長所・PRできるポイント)が、相手方の需要をどう満たすかを、できる限り詳しく、具体的に説明できるようにする。

このように、相沢が豊太郎を推薦する際に考えたであろうことは、そのほとんどが自己PRに応用できるものである。授業の中で生徒たちの話し合う内容を聞き、また課題への取り組みを見ている中では、この流れで豊太郎を推薦するということが多くのグループに

おいてできていたと認められた。

この授業実践において取り扱った、他者(ここでは豊太郎)を相手方(ここでは天方大臣)に推薦するための文言を考えることは、まさに実社会で必要とされる力そのものである。実社会において、何らかの個人の推薦者となることは珍しいことではないし、自分を客観的に分析して自分で自分を推薦するというのが自己PRである。そう考えると、この授業実践を通して小説『舞姫』を題材に、次の学習指導要領の中で目標とされている、実社会につながる知識や技能を習得する授業を作ることは、可能であると結論づけられた。

## おわりに

小説『舞姫』はその教材としての存在意義について、近年、批判的な見解も見られるようになってきている。原因としては、豊太郎がエリスを妊娠までさせておきながらドイツに置き去りにして日本に戻ってしまうというストーリーにあるのだろう。実際に、筆者が過去に『舞姫』の授業をした時、その感想に豊太郎を厳しく非難する文を書いた生徒がいるし、筆者の知る範囲でも『舞姫』を高校三年生の現代文教材として使用しなかった教員もいる。また、歴史的には、石橋忍月が『舞姫』の内容を厳しく批判し、作者である森鷗外とも論争したことが有名である。このように『舞姫』には、倫理的な問題点などを理由に教材として不適當であるとする意見もある。

しかし、『舞姫』は長い間、現代文教材の定番としてその地位を保ってきたことは事実である。また、それゆえに多くの授業実践や論考があるので、教材そのものとしての価値は低くはない。したがって、教員それぞれが『舞姫』を使う、使わないは自由ではあるが、少なくとも『舞姫』が小説教材として現代に全く価値がないとするのは極論であるように思われる。

本実践では、相沢と天方大臣の間で行われたであろうやりとりを想定し、その中で相沢がどのように天方大臣に豊太郎を推薦したか、その文言について生徒達に考えさせた。そして、そこで考えたことは、授業の最後に示したように自己PRの方法にもつながることを生徒に教示した。これについて、生徒は相沢の言葉を考える段階で、推薦の要素となる豊太郎の実績や長所等、アピールできる要素を、グループでの対話の中で抽出できた。これらのことから、小説『舞姫』を用いて、実社会につながる知識や技能の習得にかかわる授業のデザインができた。

ただ、今回の実践においては、主に授業の構築の方法について意識した側面が強い。そのために、今後の課題として、授業の中で見られる生徒の取り組みについて、その認識のレベルまでを深く読み取ることが挙げられる。具体的には、教室全体の意見のやりとりを分析することで、実際に社会につながる知識や技能の習得に至ったのか評価するなどの、さらなる実践を行うことが求められる。

森島外 『舞姫』

課題① ストーリー全体を見て、太田豊太郎の英雄と言えらるものをピックアップしてみよう。

(1) 東京大学法学部を、トップの成績で卒業した。

- (2) \_\_\_\_\_
- (3) \_\_\_\_\_
- (4) \_\_\_\_\_
- (5) \_\_\_\_\_

課題② 課題①でピックアップした太田豊太郎の英雄から言える、豊太郎の能力(長所)とはどのようなものか。2つから3つ、あげてみよう。

課題③ 天方伯(大田)は日本政府の要人であるが、彼にとっても欲しい人材とは、どのような人材だろうか。当時(明治20年前後)の日本の外交上の問題についても考慮に入れてから考えてみよう。

課題④ 最終的に、相対発言はどのように言って、豊太郎を天方伯(大田)に推薦したのか、課題①～③を踏まえて、その文言を書いてみよう。

太田豊太郎は、



ほほ〜ぞりやあ、いいね〜♪  
それでは、彼を日本に寄附って  
帰国するでしょう!

まとめ 自己PR等にも使える考え方

- ①
- ②
- ③
- ④